

ドナウ通信

No. 51

目次

科学と科学教育を考える - 『異星人伝説』出版記念講演 セルダヘイ駐日大使、吉川弘之日本学会議会議長 フランク・ピーター、笠 耐、盛田 常夫		2
特集 海外にいる子供の教育		
「我が家の娘たちの教育問題」	近藤 唯志	15
「リセに通う娘の教育」	小林 成信	17
「全日制の学校が必要では」	荒木 敏行	20
補習校便り		21
「卒業式に思うこと」	小学六年 大河内 薫子	
「お別れの言葉」	中学三年 佐分利 翔	
「お別れの言葉」	中学三年 賀澤 美樹	
「お別れの言葉」	中学三年 バログ ナターリア	
「アメリカへの疑問」	高校一年 近藤 千洋	
随想		
「世阿弥の心にふれる」	森 桂	26
「行く川の流れ」	ラパイ 里美	28
「日本語教育雑感」	佐藤 紀子	31
映画時評		
『A Beautiful Mind』(Egy csodalatos Elme)	盛田 常夫	34
日本人会からの報告		
商工会	菱木 勤治	37
ゲーム大会	野沢 正之	38
事務局	酒井 由美子	39
編集部より		40

駐日ハンガリー大使館主催
『異星人伝説』出版記念会より

駐日ハンガリー大使

セルダハイ・イシュトヴァーン

ハンガリーの物理学者マルクス教授が、ハンガリーの偉大な科学者の伝記を描いた『異星人伝説』を出版されました。英語版は『The Voice of the Martians (火星人の声)』という表題になっていますが、これをここにいらつしやる盛田さんが日本語に翻訳なさいました。ハンガリーの科学・科学者にかんする本が出版されたことを皆さんに紹介すると同時に、現在の科学の状況をアピールするために本日の会を催すことにしました。

それぞれの国はそれぞれ優れた科学や科学者を輩出していることは言

うまでもありませんが、その中でも、ハンガリー人は普通よりちょっと優れているという評価を受けています。そのことが本当かどうか分かりませんが、この本を読むと良く分かると思います。

先週、ハンガリー投資セミナーを行いました。企業の皆さんに来ていただいて、ハンガリーは投資するのに適していることを宣伝したわけです。その中で日本の経済人の一人から次のような話がありました。「ハンガリー人は民族的に頭が良くて、発明・発見で良く知られ、ノーベル賞受賞者もたくさん出しているけれど、われわれが必要なのはそのような人ではなく、勤勉に大人しく仕事をしてくれる人なのだ」と。半分冗談にこのように話されました。

このような評価をめぐって、私と経済担当参事官との間で意見が分かれています。参事官は、科学や学術の水準の高さを強調するより、

ハンガリー人の勤勉さとか、ポーランドのように組合を作ったりせず、大人しいということを強調した方が良いという意見でした。しかし、私は違うと考えます。そのような意味での投資も大切ですが、やはりわれわれの科学・技術の伝統を積極的に宣伝していくのが、私たちの仕事だと考えます。参事官が納得したかどうか分かりませんが、このような出来事がありました。

もう一つ重要な事柄として、今年七月に予定されている天皇・皇后陛下のハンガリー訪問があります。現在、ハンガリー滞在中のプログラムが検討されていますが、ほぼ決まったプログラムが一つあります。それはハンガリー科学アカデミーに出でいただきたい、ハンガリーの科学者と自由にご歓談いただくことになるところだと思います。吉川先生ともたいへん親しいクロオー・ノルベルト教授が科学アカデミーの事務局長

をされており、クロオー先生を初めてとするハンガリーを代表する科学者とご歓談されるというプログラムは、ハンガリーの特徴を活かしたもので、他の国との違いを浮き彫りにするという意味もついています。

こういうことで、本日、出版記念の会に皆さんをお呼びいたしました。あらためて、本日のご参加に感謝し、最初のスピーカーである吉川学会議会議長にバトンタッチしたいと思いません。

日本学会議会議長

吉川 弘之

一つの国を知るといのは難しいと思います。ハンガリーには立派な科学アカデミーがあります。日本と違って、ハンガリーは科学者・技術者を大切にす国です。しかし、科学アカデミーとの付き合いだけでは、なかなかハンガリー人科学者の特徴が見えてきません。幸い、私は三〇歳前後の若い時分から国際会議を通して、ハンガリーの研究者と知り合う機会がありました。いろいろな付き合いを重ねるにつれて、具体的な印象をもつことができました。

国や国民を知るといのはそう簡単なことではありませんが、私の場合はたまたま個人的に付き合い関係ができ、そこからハンガリーの研究者・技術者についてのいろいろな印象を得ることができました。私は工

ンジニアリングが専門ですからその喩で言うのですが、たとえば彼らは機械工学の専門家だと言われることを嫌うことがわかりました。つまり、まず自分は科学者である、技術者であるという幅の広い考えもつているのです。そこから出発しているわけです。

私自身の個人的なことと言いますと、二〇代からに砥石の研究を行っていました。砥石の減り方などの計算をやるわけです。ところが論文を仕上げてみて、いったい自分は科学の知識の中でどれほどを知っているのだろうかと自問しました。計算してみると、すべての知識の七万分の一ほどしか知らないということが分かり、いったいこの一〇年間に自分は何をしてきたのだろうかと考えてしまったわけです。そこで科学の是非、科学の領域について、非常に疑問を抱くことになりました。専門を変えらるることになります。

こうして三〇代半ばに一般設計学という領域に入り込むことになりました。設計には機械設計や建築設計などいろいろな設計がありますが、それらの設計を横断的にカバーする共通性を対象にする「一般設計学」というものを考案し、それを専門にしようと考えたわけです。そこで一九八六年にある国際会議でそのことを提唱したら、猛反対に会いました。設計というのは個別具体的なものと主張です。一般設計学などありえないという主張で、とくに日本の学者からの反対が強かったです。その中で、唯一、私の構想を支持してくれたのが、ハンガリー人研究者でした。彼はコンピューターサイエンスの専門家ですでに亡くなりました、歴史家でもあり哲学者でもあるような人物で、一緒に歴史研究をやるなどという人でした。非常に幅の広い考えを持っていて、ふつうに話していたのでは、彼がコンピューターサ

イエンスを専門にしていることがまったく分からないのです。そこから分かったことは、ハンガリーの科学者には領域否定という発想が非常に強くあるということです。

実はこの領域否定という課題は非常に重要な科学の現代的な課題で、これまで科学が領域を細かに設定してきたために、領域相互の意思疎通がなくなり、地球環境を汚染してきたと考えるからです。したがって、これらの分断された領域をどう総合していくのかは、非常に現代的な課題になっているのです。

もう一つ、ハンガリー人に共通する特徴があります。ふつう科学者は一つの領域のなかで説明されていない課題を見つけ、それをどう解くかという分析に取り組み、それがうまく成功すればノーベル賞の対象になるわけです。ところが、ハンガリー人科学者の考え方は、どうもこのような主流の考え方とは違うところに

ある。もちろん主流にある科学者もいるわけですが、主流から外れた考え方をする人が多い。つまり、自分で一つの領域を創り出してしまおうです。ふつう一般の科学は分析するだけでなのですが、ハンガリーの人たちにはそれをどう使うか、科学の意味まで考える人が多いのです。これは科学の応用にまで関心をもっているとも言えるのですが、そういうことではなしに、得られた人類の科学的知識によって人類がどうなっていくのかということまで関心をもっているということなのです。この点は現代の科学にとつてたいへん重要な事柄であるわけです。

われわれの科学的な知識は、ある対象をいろいろ側面から分析することで獲得できます。電気な性質、あるいは機械的な性質など、いろいろな法則を導きだすことができます。単純な現象から多くの法則群が導かれて科学的知識になります。それは

機械的な法則であったり、建築的な法則であったりするわけです。他方、たとえばコップを作るという段になると、今度はいろいろな法則を使って、現実の物を作ることになります。これはいわば科学の逆工程になるわけです。

しかし、人類の知識にとって、この両方があつて完成すると考えます。科学がこれまでやってきた法則群を作るというのは、科学の半分ではないと考えるのです。私自身、法則群を使ってどうやって物を作るのかという仕事をしてきたわけですが、このいわば「後半の科学」というのはまだ未完成です。ハンガリー人科学者の中には、この「後半の科学」について大きな考えをもって、それを予感しながら研究している人が多くと考えます。

まとめますと、ハンガリーの科学者は学問の領域固定を嫌う非常に学際的な傾向があること、もう一つは

知識の全体について常に関心をもっているということだと考えています。科学が人類に恩恵をもたらしてきたことは疑いありませんが、問題があるとすれば、科学的知識が個別の領域に分断され、バラバラに発展してきたために、人間の行動の全体的な調和がとれなくなっていることにあると考えています。まさに現代の科学はこの調和をどう回復するかというところにあるわけですが、そのことを考えるためにも、『異星人』の声に耳を傾ける必要があると考えるのです。

早稲田大学理工学部教授

フランクル・ピーテル

私がハンガリーから日本に来たのは二〇年も前です。日本は素晴らしい国だと今でも思っています。素晴らしいことがたくさんある国だと思っています。ですから、日本がハンガリーに見習うことは何もないと考えていますが、一つだけ言わせてもらえば、ハンガリーでは昔から英才教育が盛んでした。それは日本も学ぶ必要があるのではと考えています。日本の一般的な教育レベルは非常に高いと言えます。最近では教育の現場が荒れているとかいろいろ言われていますが、それでも日本の教育の一般的なレベルはハンガリーと比べても、また欧米諸国と比べても、はるかに高いと言えます。これは歴史的な理由があり、明治維新以降の学校教育政策が働いていると思います。この政策の目標は生徒全員の教育レ

ベルを同じように上げることになり、たとえばクラスで見ると、一番遅れている生徒に合わせて授業をするというようなことに特徴的に現れています。

これにたいして、ハンガリーの教育の平均的なレベルはそれほど高いとは言えませんが、一番トップクラスにある人たちへの教育は非常に盛んで、高いレベルにあると言えます。

ここにある『異星人伝説』で取り上げられている人たちも、やはりハンガリーで英才教育を受けた人たちなのです。それは具体的にどういふことか、私の個人的な事例で、つまり戦後のハンガリーの教育経験でお話ししたいと思いません。戦後のハンガリーでも、いくつかのエリート校がありました。数学とか、物理とか、化学とか、とても特別な教育をおこなう学校がありました。今でもそれは続いています。もしハンガリーが日本に貢献できることがあるとすれ

ば、ハンガリーが設立メンバーである数学オリンピックのような行事に、日本がもっと盛んに参加することだと考えます。ハンガリーは設立以来、このコンテストに参加していますが、ハンガリーの代表チームのメンバーを見ると、同じ学校から四・五名参加することが良くあります。もちろん、それは数学の英才教育を行っている学校の生徒です。歴史を辿ってみると、ハンガリーでは世界で初めて全国的な規模での数学コンテストを始めた国でした。『異星人伝説』に出てくる人々の多くも、このコンテストに参加し、自分の才能に目覚めたり、確信をもったりした人たちです。これは今でも変わりません。現在も、ハンガリーでは各種のレベルの数学コンテストがあります。日本でも最近はそのようなコンテストがありますが、ハンガリーの特徴は、多くのコンテストで教育省が受け皿になっていて、ほとんどの学校が参加し、

先生方は数学や物理、あるいは化学で優秀な学生がいれば、積極的にコンテストに出場するように促している点です。学校から一人でも優秀な生徒を送り出そうと頑張るのです。学校レベル、地区レベル、地域レベル、全国レベルの各種の予選・決勝があります。このようなコンテストに参加する生徒の数は日本の生徒数よりはるかに多いと思います。ハンガリーの人口は日本の二分の一ですが、このようなコンテストに参加する学生の数ははるかに多いのです。

日本でも英才教育的な学校があります。麻布とか開成とか、その他の有名校で数学ができる生徒がいます。ところがハンガリーと違う点は、数学ができる子がいたら、担任の先生は、「君は数学が良くできるからもう数学をそれほど勉強しないで、国語や英語に力を入れなさい」というのです。ところが、ハンガリーで良く

できる子がいたら、先生はその子にたいして、「それをもつとやりなさい、力を入れてやりなさい」と奨めるのです。コンテストに参加し、優秀な成績を収めることは学校の名誉になることです。先生も学校も、生徒の才能を最大限に発揮させるように、コンテストへの参加を奨めるのです。それは数学だけでなく、たとえばロシア語のコンテストなどでも同じことです。とにかく、ハンガリーには、教科に対応したあらゆるコンテストが存在するのです。そして、それぞれのコンテストで優秀な成績を収めた者については、一部の大学で入学試験が免除になります。私が勤務している早稲田大学では、数学オリンピックで優秀な成績を収めた学生には同じような措置をとっています。ハンガリーでは国立大学でそのような措置がとられています。

そういうことで、私が日頃思っ

ていることは、日本がハンガリーに見習うことがあるとすれば、それは英才教育だろうということです。この面でも、もつと日本とハンガリーとの交流があればと考えています。

一つ個人的なことを話させていただければ、『異星人伝説』の中に数学者のエルドゥシユがいます。彼は40歳年上で、同じ日に生まれています。彼は私の大先生です。彼の素晴らしいところは、財産を一切持たなかったことです。今の日本はアメリカの影響を強く受けていて、アメリカ的な価値基準ではその人の価値はその人の財布にあると考えられています。つまり、どれほどお金を持っているかで、その人の価値が決まるというような価値基準です。それによれば、エルドゥシユ先生の価値はゼロになってしまっています。彼は財布すら持っていないでした。小さな鞆と大きな鞆を抱えて全世界を渡り歩き、旅先で数学者たちと交

流したのです。エルドゥシユ先生は私にもつとも大きな影響を与えた数学者で、私が誇りに思っていることは、彼が最初に日本を訪問した時に、私が彼を案内できたことです。

エルドゥシユ先生だけでなく、ハンガリーから出た素晴らしい学者がいます。『異星人伝説』にはそのような人々が描かれていますので、是非、これを読まれて、日本がハンガリーから見習うことが発見できれば、素晴らしいことだと考えます。

元上智大学理工学部助教授

笠 耐(りゅう・たえ)

縁があつて東大教養学部に勤め始めました時期には、フラインマン物理学やパークレイ物理学などの新しい潮流が生まれてきました。当時の教養学部の物理学教育は少し物足りない感じがしましたので、もっと教育の問題を考えて見たいと考えるようになりまし。一九七五年に英国のエンジンバラで物理学教育の国際会議がありまして、それは今から見ても規模の点でも、また今日の教育の問題を包括的に提起している点でも、もっとも重要で大きな会議でなかつたかと考えています。そこで今日の物理学教育の世界的な指導者とめぐり合う機会があり、マルクス教授とも出会うことになりました。

まず。そういう経緯があつて、湯川秀樹博士を初めとして、日本に友人が多く、京都大学の基礎物理学研究所の客員教授をも務められました。本日ここに出席されておられる素粒子物理学の小沼通二教授(元日本物理学会会長)や宇宙物理学の佐藤文隆教授(学術会議会員)も、マルクス教授の友人であります。

昨年、英国で出版されました英国物理学協会が作成した世界で最も新しい、一六・一九歳を対象にした物理学コースである『アドヴァンスイン物理学』のテキストにも、宇宙の暗黒物質にかんする章で、ニュートリノの質量を最初に概算したのはマルクス教授たちであったことが書かれています。もちろん、ニュートリノの質量の予測については、当時と現在とは随分内容が違うのですが、そういうアイデアを出したことが評価されているわけです。

マルクス教授は一九六〇年代から

中等教育における物理学教育の改革に力を入れておられ、一九七五年のエンジンバラ会議の後、毎年、ハンガリーで物理学教育の国際会議を組織されてきました。「ダニューブ・セミナー」をはじめ様々な国際会議には、西欧東欧を問わず、多くの科学教育者が参加してきました。私も一九七八年に日本の物理学教育の話をして欲しいと言われ、参加しました。以後、何度も参加しましたが、この会議の特徴は著名な物理学教育者に混じつて、ハンガリーの高校の先生方が多く参加されていることです。経済的な理由で、高校の先生が海外に出かけるのが難しいので、著名な物理学教育者を海外から呼ばれてそこに高校の先生方を招待されるという形をとつてこられました。会議ではマルクス教授自身が通訳の仕事をされ、会議の合間やセミナーの後に組織されたツアーにも、ガイドとしてハンガリーの歴史的な名所を案内されるの

が常でした。また、マルクス教授は第三世界の教育にも熱心で、呼ばれればどこへでも出かけるという気さくで行動力のある、私にとって尊敬してやまない先生です。

マルクス教授の片腕として物理教育で活躍しているトート・エステルが、マルクス教授のアドヴァイスを受けながら作成した高校生向けの教科書があります。高校の最上級年で教える「現代物理」と題する教科書です。京都で高校の教師をしている私の息子が生徒と一緒に読んでみるとなかなか面白いことが分かりました。そこで、これを息子と一緒に訳しました。語学が得意でないものから『異星人伝説』のようにうまく訳せていないのですが、今日、ピーター・フランク先生にお会いすると息子に話したら、是非、一部差し上げてくれというものですから、これを持ってきました。

これは丸善から三分冊で出版され

ており、統計物理、原子物理、原子核物理から構成されています。原書ではこれに宇宙物理が加わります。これは一〇年前に出された本ですが、ハンガリーでは今でも高等学校で使われています。もちろん、すべての学生が使う本ではなく、大学へ進学する学生が読む本なのですが、日本の教科書のように堅苦しいところがなく、自然に物理が勉強できるようになっていきます。日常的な事例を例題にしていますので、文系の方でも読めるものです。もちろん、専門の日本の物理学者から見れば、厳密でないところや数学的証明が欠如していると言われるかもしれませんが、非常に面白い教科書だと考えています。ただ、「高校物理」と題されていますが、日本では指導要領があるので教科書としては使えませんし、大学では何故「高校物理」と題されているハンガリーの教科書を勉強しなければならぬのかと言われますか

ら、中途半端な存在になってしまい、日本ではあまり使われていないのです。

「異星人伝説」のなかに、二〇世紀初頭のハンガリーにおけるギムナジウムの教育は素晴らしかったという箇所があります。また、戦後の民主的な国家の中で、これに匹敵するのは日本の高校ぐらいだという指摘があります。これに関連して、日本の高校の先生から質問を受けました。ここにいらつしゃっている大学の先生方は別なのですが、一般に、日本の大学の物理学者はあまり教育に関心がありません。しかし、高校の方では物理教育に熱心な人が多く、日本で国際会議を開くにあたっては、高校の先生方をなるべく多く参加させるべきだと説得して、物理教育の国際会議を開いてきた経緯があります。その中で分かったことは、こうした高校の物理教育の中心になって

いる先生方の中には、名古屋大学物

理学科の出身者が多いことが分かりました。彼らはガリレオの山猫学会をもじった通称「野良猫（Stray cats）学会」という自主的なサークル、「愛知・岐阜物理サークル」を作り、高校の物理教育でもっともアクティブな先生方の集まりになっています。彼らはいろいろな国際会議に自分たちで製作した実験装置を持ち込み、面白い実験を披露するので、たいへん評判になりました。実験で見せれば、言葉の壁を破ることができるところです。以後、アメリカ、ヨーロッパ、中国で、彼らは引張り蛸になりました。

彼らの行動の基礎には、たんに物理学が発展すれば良いという考えではなく、人類の平和的な発展に貢献すべきだという考えがあります。こうした行動を生み出したのは、名古屋大学物理学科の坂田昌一先生の影響があるのだと思います。当時、名古屋大学の物理学科は日本でもつ

とも自由で民主的な雰囲気をもった物理学科だと言われていました。大学を卒業して高校の教師になってみると、受験競争や実験装置の制約から思い描いていた教育ができる環境がない、そういう苦しみを味わいながら、そこから何かを作り出そうという気持ちが強く沸き起こったのだと思います。その点では、旧体制の制約のなかで苦しんだハンガリーの天才たちとも相い通じるところがあり、それがハンガリーの高校教師へインパクトを与えたのではないかと考えています。その一つの事例として、愛知・岐阜物理サークルの高校の先生方を、ハンガリーの高校の先生方がハンガリー物理学会の名誉会員に推薦されたという経緯があります。高校の先生で博士号をもっていないなかつた川勝博さんが香川大学教育学部の教授に就任されたことには、ハンガリー物理学会の名誉会員であるということも役に立ったと思いま

す。現在、教員養成教育をはじめ多方面で川勝先生は活躍され、日本の大学教育改革にも貢献されていますが、マルクス教授やハンガリーの高校の先生方による温かい励ましと評価があったことは特筆に価すると考えています。

また、ここに出席されています小沼先生は、物理学会会長の時に物理学教育委員会を設置され、さらに学会の規約を変えて、物理学者がもっと教育に関心をもつべきことを喚起してくださいましたし、江澤洋先生は学会会員でいらつしやつた時に学会議の中に物理教育小委員会を設置し、学際的に物理教育を考えるようにしてくださいました。このお二人の先生は、一九八六年にアジアで初めて上智大学で開催された物理学国際会議にワークショップオルガナイザーとして、マルクス教授と一緒に活躍されました。その意味でも、マルクス教授の日本の物理教

育に与えた影響は非常に大きいと考えています。

この『異星人伝説』が出版されたことにより、若い先生方がマルクス教授の志を受け継いでさらに物理教育を発展させることができるのだと考えます。その意味で、本書の出版を歓迎し、感謝しています。

編訳者挨拶

盛田 常夫

ご参集された皆様、本日はお忙しいところ、この会にお出でいただき、著者マルクスともども、御礼申し上げます。またセルダヘイ大使には、この会を主催いただき、たいへん感謝する次第です。

セルダヘイ大使とは、私が専門調査員で日本大使館に勤務して以来のお付き合いです。現職の日本の首相として、はじめて海部総理がいらつしゃった時に、私が経済大学での学生との対話集会を組織することになり、セルダヘイ大使には同時通訳者としてご協力をお願いしました。もう時効でしょうからお話ししますが、当時、対話集会なのに、首相官邸から事前に質問を集めるようにという指示がありました。総選挙を控え、失点を恐れた側近の考えだと思いますが、いくらなんでも対話集会なの

に事前に質問を集めることなどできないと思います、そのまましておきました。しかし、一行が日本を出発した後も、訪問先から「質問はまだか」と矢の催促があり、仕方が無いので私が七点の質問を作成しました。そうしたら、今度は回答も準備しろというわけです。

官邸は逐語通訳で時間を稼ぎたいという意向でしたが、同時通訳で臨場感をだした方が良いというわれわれの提案が通りました。そこで、前日に、セルダヘイ大使のほかに二名の日本人通訳者を集め、リハーサルをして本番に備えたというわけです。質問も回答も事前に分かっているのですから、本当の同時通訳ではなかったのですが。当日は、学生を学長室に呼び、七つの質問をはさみで短冊にして配り、順番通りに質問するように指示しました。

本番ではあまりにテンポが良く進化したために時間が余り、司会を務

めた友人のザライ副学長がさらに質問を受け付けたいと切り出しました。私はステージの袖で進行を見守っていました。その時に海部総理がギクリとされたのを覚えています。辛い難しい質問ではなく、この即興の部分はセルダヘイ大使がうまく通訳してくれて、すべてが筋書き通りに進んだのです。セルダヘイ大使とはこのようにお世話になった間柄です。

さて、本書の内容については、改めて説明することもないと考えますので、この本に託した私の思いをお話したいと思います。

この書物はいわば昔流に言うところ「偉人伝」の類のようなものです。もつとも、本書は俗流的な伝記とは異なり、本来の科学者の生き方や発見の方法を教えてくれるものです。そこで、この発見の方法ということについて、少し考えて見たいのです。私は文系ですから、数学や物理学

をきちんと学ぶ機会はありませんでしたが、大学院で集合・位相や抽象代数の講義を受けました。そこから一つの事例をとってみたいのですが、集合論の講義が進むと、カントールの無限集合の類別の話題には入りません。通常、数学基礎論では、集合の公理から始まり、無限集合の話題に入ります。ここら来ると、論理だけを追っていくのが、たいへん苦痛になってきます。数学を専攻しないふつうの凡人には論理だけで公理体系を辿っていくのはたいへん苦しく、その現実的な意味を掴むことがほとんど不可能になってきます。数学嫌いになるのは、だいたいこのような理由によります。

しかし、カントールが無限集合を類別しようと考えたのは、公理にもとづく論理的思考の積み上げの結果ではないと思います。非常に具体的な推測や発想から出発しているはず。整数の集合と有理数の集合は

無限集合として同値であるのか、連続体である実数の集合の濃度は、整数の集合より濃いのではないか。それなら、それをどのようにして類別できるのか。抽象的な理論が構成される前に、このような問題の発見や推測があるはず。これはいわば発見の方法（プロセス）です。つまり、公理体系が構築される前に、このような思考の営みがあります。

通常、科学的な発見は公理的な思考の積み重ねの結果ではありません。まず最初に発見があり、後から論理付けしていくのです。つまり、発見や推測がまずあり、証明は後追いです。だから、科学を勉強するにあたって、発見の方法が大切になります。

ところが、科学や数学の理論を教科書として仕上げる時には、逆にそのような発見の方法（プロセス）を隠して、あたかも論理一貫して発見されたかのような公理体系として提

示するのです。これが教育の方法です。それが教育の効率を上げることには疑いありませんが、他方で数学や科学にたいする関心を失わせることになります。

ここに、教育の方法と発見の方法の矛盾があります。とくに日本の学校教科書は、必要以上のことを書かず、非常に薄っぺらなものになっています。それで科学や数学に関心をもつことなど、不可能でしょう。そこで、『異星人伝説』になるわけです。そこには、生きた発見の方法が実験として語られています。この本から若い読者が読み取るべきことは、まさに発見の方法を知ることだと思ふのです。

今まさに科学教育の危機が語られています。それは何よりも、発見することの楽しさ、発見の不思議さが教授されないうちに、大きな原因があると考えます。このような意味で、発見の楽しさを知るために、

『異星人伝説』を多くの若い人々に薦めていただきたいのです。

最後に少し私的なことに触れさせていただきます。

今回の出版は、半ば、自費出版のようなかたちでおこないました。現在の出版状況のなかで、このような著書の出版を引き受けていただくところはありませんでした。しかし、何としても、この著書を出版したいという気持ちが強くなり、これまでハンガリーを「飯の種」にしてきた感謝の意味を込め、初版の出版リスクを私がとることで、これまでお世話になってきた日本評論社に引き受けていただくことになりました。

日本評論社には、コルナイの著書の発刊でお世話になったばかりでなく、『経済評論』誌や『経済セミナー』誌で長期にわたってコルナイの論文の連載をしていただきました。私の著書の刊行でもお世話になりました。そのような出版社に引き受けていた

だけ、これまでのお返しができるという意味でも、感謝しています。ちょうど、私自身、昨年四月に転職し、一八〇度異なる分野で仕事をするようになったことにたいして、一つの区切りをつけるという意味もありました。

本日の会には、私の方からほぼ五〇名余の招待者をリストアップしました。ご参集いただいた方々は、私がハンガリーにかかわる大きなキツカケやチャンスを直接間接に与えてくれた方々です。その意味では、ハンガリーの私的な同窓会のようなものだと考えています。簡単にご紹介を含めて、ハンガリーとの関係をご披露したいと思います。

何よりも、一ツ橋大学の倉林義正先生に「ハンガリーは面白いよ」と言われなければ、永遠にハンガリーとの関係はなかったと思います。そういうことがあって一九七八年末にハンガリーへ旅立ちました。

最初の翻訳『社会主義と市場』(一九八〇年)の書評を『エコノミスト』誌に書いてくださったのが、佐藤経明先生です。先生には今回の出版にあたり、出版社を奔走していただきました。

一九八八年に外務省の専門調査員、ハンガリーの初代専門調査員として再びハンガリーに長期滞在することになったのは、当時、東欧課におられた川合さんの推薦によるものです。最初の滞在当時、川合さんは参事官としてブダペストの日本大使館におられ、また六〇年代初めに語学研修生としてハンガリーでの生活を始められた外務省のなかでもハンガリーの開拓的な存在です。

専門調査員として赴任したときに、あの体制転換(東欧革命)が起きました。その最中に出会ったのが、野村證券グループです。当時、野村は東欧進出を計画し、他方ハンガリーは改革政策の策定と実行という課題

をもっていました。ブルーリボンコミッションという政策グループが結成され、ジョージ・ソロスを含め、内外の経済学者や実業家がメンバーになっていました。野村総合研究所にこのグループのファンディングメンバーとしての参加を打診したことから、野村グループとの関係が始まりました。一九九〇年三月には野村総合研究所の水口弘一社長がブダペストへいらつしやいました。今、野村総研の顧問をされていますが、水口社長にお願ひして、野村総研に移ることにになりました。

当時、野村ロンドンの会長でいらつしやったのが、中沢さん(現国際証券社長)です。その後、中沢さんは野村証券の常務として国際金融担当となり、それまで大和証券が独占していましたハンガリーのサムライ債発行で、野村証券が初めて引き受けることになりました。その端緒を開く仕事を一緒にいたしました。サ

イムラ債の発行引き受けが活発化した一九九五年暮れに、ハンガリーのホルン首相の訪日があり、野村証券がホスト役として投資セミナーを開催する榮譽を受けました。

ちょうどホルン首相訪日の直前に、私の郷里富山県の富山商工会一行が野村ツーリスト主催でブダペストに来るといふ奇遇があり、そこで知り合ったのが立山科学工業の水口昭一郎会長です。それがきっかけで、ちょうど一年前に、私自身がまったく違う世界に飛び込むことになりました。

本当に話せば長くなるのですが、このようなハンガリーにかかわる人の輪があつて、それで『異星人伝説』もこのように実現したといえるのです。本書の出版を契機に、さらにこうしたハンガリーをめぐる新しい人の輪が広がることを期待して、私の話を終わらせていただきます。

特集 海外にいる子供の教育

我が家の娘たちの教育問題

近藤 唯志

日本人会 ドナウ通信部会の方から、「海外にいる子供たちの教育問題」をテーマにして、何か書いてくださいとの依頼をいただきました。

実のところ、自分の娘たちの教育について「問題」として深く考えたことがあまり無かったので、まとまったことが書けるのかどうか、やや悩んだりしましたが、「まあ、とにかくやってみます」と後先考えずにお受けしてしまいました。

まずは非常に個人的なところから入らせてもらいます。一九九七年、家族ともども八月のブダペストに到着したときには、前任者の子供たち、さらには既にブダペストに居られた諸先輩方のご子弟が通っておられる

ということから、特にほかのことは考えずに、「娘たちはアメリカンスクールに行き、補習校にもお世話になる」と決めこんでいました。

下の娘は小学校三年生でしたから、入学申請と同時にアメリカンへ入学、八月末からアメリカンと補習校の両方に通い始めました。上の娘は、六年生で、アメリカン入学には試験に合格することが必要でした。後になつてみれば、親の情報収集不足で子供につらい思いをさせたという反省はありますが、そのときには、試験を受けて入られたお子さんの体験談から「試験は簡単」と思い込み、ろくな準備もさせず、いきなり受験して全く分からず、試験を最後まで続けることも出来ないという状態で不合格となつてしまいました。実際のところ、「試験を受けて入られたお子さん」というのは、アメリカで教育を受けてきた実績があり、そういうお子さんにとって見れば、ただの

簡単な英語の試験だったのでしようが、うちの娘のように、海外は初めて、英語は駐在が決まって慌てて通った駅前会話学校程度の準備ですから、試験官に情け容赦無いネイティブ英語で話し掛けられて、頭の中は真っ白で、なにも分からずパニック状態に陥るだけの結果でした。それから、数ヶ月の浪人生活を経て試験に合格、ようやくアメリカンスクールに通い始めることができました。一方、下の娘も、アメリカンスクールに通っているとはいえ、なんだか授業も分かっていないのか分かっていないのか、算数の問題もまず問題を理解するのに一苦労という状態が続いていました。まあ、とにかくにも、我が家の娘たちは、このようにしてハンガリーでの学校生活を始めたわけです。

このように、必ずしも順調な滑り出しとは言えなかった学校生活を送る娘たちを見てみると、取り敢えず、

日本に帰ってからどうしようなどという長期的な展望を持つ余裕も無く、ただ、学校に慣れてほしい、親の手伝い無く宿題が出来るようになってほしい(親も楽になるという邪念はありました)という、きわめて近くだけを見た希望を抱きながら前半が過ぎていったという感を持っています。そして、二年が過ぎたころから、子供たちは、親にも分からぬ英語を口走るようになり、家にも多国籍の友人が訪ねてくるようになり、アメリカンスクールでの生活を楽しめるようになってくると、親にも余裕が出来て、ようやく子供の教育とは、なんて言うことにも考えが及ぶようになってきました。

然し、実際には、両親ともハンガリーに来て五年にもなると、日本の教育の状況に関する情報は、非常に断片的なものでしかなく、またニュースソースも限られたものしかないために、結局は親自身が受けた三〇

年も前の教育を基準にして考えざるを得ません。一口で言って、アメリカンスクールと言うのは、学校外のこと、授業時間以外のことについては児童、生徒の自律に任せている部分が大きく、ミドルスクール、ハイスクールでは宿題と言うのは殆どがレポート、プレゼンテーション資料の作成が課題になっていると言う印象であり、強い管理や、問題に対する回答作成の技術習得重視と言うところに重点がおかれていると一般的に言われている日本の教育とは一線を画しているように考えられます。また生徒間の関係でも、駐在員の子供が多数派を占める学校ですから、多様なのが当たり前で、異質なものを受け入れて成り立っているわけで、妙な壁はないようです。

こういった環境の中にいれば、自己主張は自然と強くなるし、また先生や友達との付き合いも日本のそれとは違って、フランクなものになっ

ていくのは当然と考えられます。こうして体得してきた異文化が、日本に帰って日本の学校に入学する時として邪魔になり、「いじめ」の対象にさえなると言うことは、残念なことですが、理由がわからないわけはありません。

でも、教育が先か社会構造が先かという議論は別として、学校と言うのは社会の縮図みたいなものですから、その特質を理解するのも、日本人としては必要なことのようにも思えます。ハンガリーに来て、入学するのにさえ苦労をして、外国語での授業に慣れるのに努力し、アメリカンと補習校の二重生活を続け、深夜までかかって宿題をこなす毎日を送って、今度は日本に帰ったら、また日本の特異な部分に体を馴らしていかなければいけないと言うのは子供たちにとっては大変なことです。然し、親の我侭かもしれないませんが、それもひとつの大切な経験だし、日本

と海外と異なった教育を受けたという
ことを自分の特徴として多目に目
立っていつてもらいたいと思ひ、い
ずれにしても避けられないことなの
だから、こちらで異質なものに馴れ、
溶け込んでいったわけですから、日
本でも出来るのだろうと楽観するよ
うにしています。

今、はつきり理解していない日本
の状況を考えて、子供たちへストレ
スをかけるよりも、子供たちには現
在を大事に自分を磨くことに一生懸
命になってもらいたい、ここでしか
出来ない経験を刻み込んでいつても
らいたい、それが、将来の糧になり、
問題を回避、あるいは解決する助け
になるのだろうと思っています。問
題が起きるとしたら、そのときに対
処していくしかないのだろう、もし、
教育問題があるのだとすれば、それ
が発生した時に考えようというのが、
今の段階での私の結論です。

リセに通う娘の教育

小林 成信

我が家の七歳の長女は、アメリカ
ンスクールではなく、フランスのイ
ンターナショナルスクール（通称リ
セ）の二年生である。三歳の時、
ベルギーに家族で赴任し、現地の幼
稚園（フランス語）に二年通った後
ベルギーのリセの一年生となった。
それから四カ月後にはハンガリーに
転勤になり、引き続きブダペストの
リセに転入して一年三ヶ月、現在に
至っている。

リセに入学させたのは、まず現地
の幼稚園がフランス語だったこと、
ベルギーの場合は全日制の日本人学
校という選択肢もあったが、（半年
の時差はあるが）せっかく海外で暮
らしているのだから、外国語を身に
つけさせてやりたい、異文化の中で
もまれ、国際的な視野を持った人間

に育ってほしいと考えたからである。
また英語はこれから嫌でも学ぶこと
になるだろうし、もう一ヶ国語がで
ければ理想という気持ちもあった。
また、家内がフランス語との付き合
いが長く、フランス語でのコミュニ
ケーションに不自由しないのも一因
ではあった。

だが意外なことに家内は長女をリ
セに入れることには反対だった。長
女のおっとりした性格ではリセには
向かない、というのが理由だった。
だが、ベルギーで日本人学校に入れ
た場合、次の任地に全日制の日本人
学校がある保証はなく、リセなら、
世界中どこに行ってもあるし、ちゃ
んと高校まで卒業して、バカロレア
（大学入学資格試験）にさえ通れば、
日本の大学も受験資格があるのだ、
という理由で家内を納得させたので
ある。

そんな先までフランス語教育をや
らせるかどうかは別として、実際問

題次の赴任地であるここハンガリーには全日制の日本人学校はなく、どちらにせよ、インターナショナルスクールの選択は避けて通れない問題であった。

ベルギーのリセは、世界中のリセの中でそのレベルがナンバー2（ちなみに一位はイギリス）といわれるだけあって、一年生といえども毎日宿題のオンパレード。おまけに幼稚園でアルファベットは覚えたものという前提で授業が行なわれるため、リセの幼稚園出身ではない長女は、フランス語は理解できても、読み書きは全くだめだったので最初は大変だった。

なんとか家庭教師を見つけ、特訓をしてやっと授業についていった。

日本にいればまだ幼稚園の年長なのに、（ヨーロッパの学校は一月生まれから一二月生まれで一学年なので、一二月生まれの長女は九月のり

せ入学の時点ではまだ五歳だった。）こんなに勉強させる必要があるのか、悩んだものだった。だからベルギーのリセに通っている日本人の子は、日本語学習は通信教育のみで、週一回の補習校さえ行っていない子が多かった。あまりにもリセの負担が大きかったからである。

幸い、ハンガリーのリセは、マンモス校だったベルギーに比べるとこじんまりとして生徒数も少なく、のんびりしている。だからこそ、補習校といえどいわば準全日制で、ハードなハンガリーの日本人学校のスケジュールをこなせるともいえるのだが。しかし困ったもので、宿題が少ないのいいことに補習校の宿題だけやってリセの勉強をサボっていたら、見る見るうちにフランス語の成績は急降下。母国語でない分勉強しないとそれは顕著で、家内はあわててフランス語学院に走り、ここでも家庭教師を確保し、週二回フランス

語を見てもらうことになった。

長女の放課後は、月水が家庭教師、火金が補習校、木曜日がピアノとすべてうまっている。

小学校低学年のうちから、こんなに勉強させなければいけないのだろうか、日本に帰ったらどうせフランス語なんて忘れてしまっただろうに、という気持ちが頭をもたげる。

我々の勤務は、通常五、六年（二、三カ国）海外を回った後、日本に戻り、また五、六年（もちろんそれ以上になることもあるが）東京勤務の後、再び海外に出る、という生活を定年まで続けることになる。子供の教育のことを考えた場合、子供が何歳のときにどこにいるか、先が見えない分不安に思うことも多い。だから、赴任先にあるかわからない全日制の日本人学校よりは、世界中同じ教育が受けられるインターナショナルスクールを選択し、（それが英語であろうと他の言語である

うと)文化のギャップに悩みながらもたくましい日本人に成長してほしいというのが親の切なる願いである。またこれだけ海外に出る日本人が増えてきている今、帰国子女受け入れに配慮する日本の学校は増えることはあっても減ることはないだろうし、帰国子女そのものが珍しくなくなりつつある現在、若干の逆カルチャーショックは帰国当初はあっても子供はじきに適応してくれるものと思っ

ている。なにより長女は日本と日本の学校が大好きなのだから。

とは言っても、一旦日本に帰国後、再度海外に出た時のために、フランス語はある程度キープできていなければならぬが、幸い帰国子女のためのキープクラスは、英語のみならず、フランス語でも受講可能であることがわかり、(小三以上)やや安堵した。

ただリセで高校まで卒業し、バカロレアを取るとなると、もうほとん

どフランス語が母国語、日本語を外国語として学ぶくらいでないと難しい、ということとは実際リセを卒業された知り合いのお子さんたちをみてもわかる。

あくまで母国語は日本語、リセに入れたことと矛盾するようだが、日本の大学に入学しても今度日本語の授業についていくのが大変というのでは困る。全く子供の教育のことを考え出すと悩みは尽きない。

無論子供が高学年になってくれば、くほど、本人の意思、適性、希望などを最大限に考慮しなければならぬいし、必ずしも親の思いどおりにはいかない面もでてくるだろう。

何かの記事で、海外で文化の違いを乗り越え、頑張つて優秀な成績を収めた子供は日本の学校でも必ず頑張ることができる、という一文を読み、大いに励まされた。

また何年か前に帰国子女となる子供たちをつれて海外から帰国した友

人の、「その都度、その場所での子にとつてベストだと思える選択をしていけば大丈夫」という言葉も今の手探り状態の私たちには大きな心の支えである。

その友人は、八年ほどの海外駐在を経て帰国した後も、二人の息子さんを引き続き東京のインターナショナルスクールに編入させ、現在に至っている。

日本国内で、日本の教育を受けさせない選択というのは、確かに少数派ではある。友人に確認するとそれはあくまで本人たちの意志であり、毎年授業料を支払う前に息子さんたちに再度確認するそうである。ただし、インターナショナルスクールは授業料の負担が重い上に各種学校としかみなされないため、学割がきかず、中学生なのに通勤定期で通学しているところばかりだ。これだけ国際化の進んだ二一世紀、そういう選択がなされてもおかしくない時代に、

これははなはだ時代錯誤的な現実ではないだろうか。

この問題については、たまたま補習校でいただいた、東京のインターナショナルスクールの代表が書かれた、二〇〇二年二月二七日付の朝日新聞の記事にもくわしい。

これから、日本社会がそういうマインリテイを尊重する社会、いい意味での個人主義を認め、複数の価値観を認める社会になった時、和を重んずる日本古来のメンタリテイと融合しうる真の国際人が生まれる土壌ができるのだと思う。

全日制の学校が必要では

荒木 敏行

現在ハンガリー日本人補習校は六〇名以上の生徒を有しておられるとのことですが、それぞれの事情により抱えている問題は違うと思われる。私の場合は企業から派遣されている駐在であり期間も長くて三、四年と限られており、帰国後に次のような問題を抱えております。

・全日制日本人学校が無い事により、日本で教育を受けた子供たちとのレベル格差

・週休二日制導入による学校間の教育レベル格差

・帰国子女受入校の定員と帰国子女の差による入学困難

・滞在国語もしくは英語等の語学の維持

現在は子供をアメリカンスクールに通わせておりますが、駐在期間中に英語をマスターする事は決して容

易ではなく、英語も出来ず日本人としての教育もまともに受けられない中途半端な教育を受けた子供たちが日本で苦勞する事は容易に察せられます。

今後全日制的日本人学校の設立が難しいとは聞き及んでおりますが、生徒数がこれだけいるにもかかわらず、全日制的の学校がないと言う事は選択の幅を狭めている事に他なりません。

このままの状態では、高校大学等の子弟をもつ家庭だけではなく、小中学校の子弟を持つ家庭でも単身赴任せざるを得ない状況が来ないともいえません。

全日制的の日本人学校がある上でインターナショナルへ行かせたり、現地校へ行かせたりそれは各家庭の事情により選択すれば良い事であって、まずは全日制的の学校の設立に向けて動き出しても良いのではないかと考えている次第です。

補習校便り

卒業式に思うこと

小学六年 大河内 薫子

今日、私はこの日本人補習校で卒業式を迎えました。ハンガリーに来て三年がたちました。飛行機でブダペストに初めて入った時は雨でした。景色も家も人も今まであまり想像しない世界でした。

A B Cも知らずにハンガリーに来て、初めは先生の言葉にみんながどんな行動をとるのかを見るのが、せいいっぱいでした。それでも寒い冬の中バスで学校へ行くのは楽しかったのを覚えています。学校へ通い始めて約三カ月後、外国人の友達の家へ招待された時、心が本当にあたたかくなつた気がしました。

補習校では、友達ともいっぱいおしゃべりできて、先生はやさしいし、

日本語がとても大切で、初めて日本語を深く考える場所になりました。家に帰ると、母が、

「おかえり。学校どうだった？」

と、やさしくあたたかい声で言ってくれるのが楽しみで、少しワクワクするしゆん間でした。母と妹と食たくテーブルを囲んで一日の出来事を話して、笑いました。でも、ベッドに入ると、涙が自然と出てくる時もありました。アメリカンも補習校も楽しいはずなのに。おばあちゃん、おじいちゃんのことを思うと悲しくなりました。

その内、何度も日本へ一時帰国してヨーロッパ旅行にも行くようになると、ハンガリーの生活もステキだな、と思うようになりました。

今、良いことも悪かったことも思い出されます。友達にいじめられたこと、くやしかったこと。あのころ悲しい時を一人でたえて、がんばってきたと思っていたけれど、今ふり

かえると、眠りにつくまで話し続けた私の話をずっと聞いてくれた両親には感謝しています。そして、祖母からの電話にも支えられ、先生にもはげましていただきました。でも、勉強の面では、母には期待できないし、父は帰りがおそいので、私は一人ががんばったような気がしています。

ハンガリーに来て、日本では知らなかった事もたくさん知りました。まず、父が少し料理できることを知ったことです。母が熱を出して知っている時、父と妹と私で家事をしました。父が作る野菜のためはおいしくてビックリしました。でも、母よりおいしくありません。そして食事後、三人でクッキー作りをしました。私の注意を父は聞かないので、あれほどまずいくッキーを食べたのも初めてでした。父は、家事は仕事よりつかれると言っていました。私は父はすばらしいと思いました。

それから、母があれほどワインが飲めるなんて知りませんでした。いつも、世界一おいしい料理を作ってくれて、優しくピアノをひいている母が、ワインを飲んでハイパーになっている姿は、ハンガリーに来るまで知りませんでした。こんな父と母が私の両親でよかったと思っ

す。
日原先生、仲川先生、島田先生、吉原先生、坂井先生、本当にお世話になりました。日本とハンガリーの二つの学校に通うことができて、よかったと思っています。
ありがとうございました。

お別れの言葉

中学三年 佐分利 翔

僕は、三年前にハンガリーに来ました。六年生の時でした。そのころは、アメリカンの授業は、ちんぷんかんぷんで、宇宙人が喋っているみたいでした。だから、補習校の授業や、いろいろな行事はとても楽しかったです。そのひとつの思い出として残っているのは夏合宿です。自分の親友とプールに飛び込んだり、テニスしたりといろいろなことをしました。その中でも一番楽しかったのは劇でした。みんなで力を合わせて何かを作り上げることはとてもいいことです。そういうことがあって毎年楽しみでした。自分にとって、補習校とは心のオアシスのような存在でした。アメリカンの授業がつまらない分、補習校の授業は最高に楽しかったです。でも、英語が分かるようになるにつれ、アメリカンが楽し

くなり、補習校が面倒くさいと思っただこともありました。でも、やっぱり補習校は必要です。日本に帰ったときに役に立つのと、友達ともしっかり仲良くなれるからです。

しかし、一番つらいのは仲良くなった友達と別れなければいけないことです。僕の場合、中一のころには男子が四、五人いたのに今は僕一人です。でもその分、次に会うときは本当に嬉しいです。補習校は、いろいろな思い出や友達が生まれるところだと思っています。

この補習校があったからこそ頑張っただけではありません。これからも、そういう場所であって欲しいと思います。

お別れの言葉

中学三年 賀澤 美樹

日本語で日本人と思いきり話せるころ、それが私にとっての補習校です。いくら最近アメリカンスクー

ルにも慣れてきたとは言っても、英語で自分の気持ちを正確に表現するのはまだまだ難しいです。英語で話すときはいつも自分がある程度抑えなければいけないし、相手が何を言っているのか理解しようと一生懸命なので、どうしても疲れてしまいます。でも日本語なら、別に何かをいちいち考えながら話す必要も、そんなに力んで相手の話を聞く必要もありません。例えくだらないおしゃべりであっても気楽に話せるのはとても楽しいし、私の大きな支えとなっていると思います。

一年半前ハンガリーという未知の世界に来て、アメリカンスクールでの英語の生活が始まりました。アメリカンでの生活はすべてが新しいことばかりで、何がなんだかさっぱりわかりませんでした。授業の途中に先生が何かを言ったと思ったら、周りの人が一斉にノートを開いて何かを書き出したのに、私は何をやらな

くてはいけないのかが分からなかった。残り時間を何もしないでボーっと過ごしたことも何度かありました。最初は転校生への珍しさに話しかけてきてくれた人たちも、時間がたつにつれて話しかけてこなくなりました。アメリカンでの毎日がそんな風だったので、補習校は特に楽しく感じました。宿題がたくさんあってアメリカンだけでも精一杯なのに、補習校なんていつでも疲れるだけだと口では言っている中では補習校を楽しみにしている私がいきました。

補習校は普通の日本の学校やアメリカンに比べて行事がとても多いし、人数も少ないのですぐにみんなと仲良くなれる場所です。日本のいろいろな地域からいろいろな人たちが集まる補習校は、ほかの地域を知ることのできる場所でもあります。来年度から高等部になると、ほかの人たちと話す機会はほとんどなくな

ってしまおうと思います。勉強も今より大変になることでしよう。それでもみんなと接する機会がまるつきりなくなるわけではありません。補習校の先生方、そして生徒の皆さん、今までありがとうございます。これからよろしくお願いします。

お別れの言葉

中学三年 バロゲ・ナターリア

とうとう卒業式の日をむかえました。実はこの日を九年間ずっと待っていました。でも今日が近づくとつれて、だんだんとうれしさよりも悲しさの方が強くなってきました。途切れなく続いたこの九年間が今日を最後にとつぜん終わってしまうのが信じられません。

一九九三年の四月から補習校に通ってきました。六歳の時は日本語は一言も話せませんでした。補習校入学前の一年間は毎週系見先生に日

本語を教えてもらいました。糸見先生のおかげで日本語の基本的なことを勉強できたので小学校一年生の時の国語の授業は割りと楽でした。ただ問題は先生やクラスメイトが言っているのがほとんどわからなかったことです。小学校一、二年生の時はよく覚えていませんが、入学の面接は印象に残っています。その面接は当時　ロウメル・フロリシユ通りにあつた日本大使館の中の暗い部屋で行われました。森本先生が絵を見せて、私は日本語で答えなければなりませんでした。不思議なのは、この面接が私にとつてけつしてマイナスのイメージではなかつたことです。それはきつと森本先生がやさしかったからだと思いません。

補習校の思い出の中で一番つらかつた事は夏の合宿でした。私にとつて二日間日本語だけしか使えないのは大変な苦痛でした。だから、家を出発する前にはいつも泣きました。

そして病気になつたらいいなと思つて、私は病気だ、病気だと一生懸命自分に言い聞かせていると、本当に熱が出て病気になりました。この私の苦痛だつた合宿中も、先生たちや生徒たちがみんなすごくやさしくて、親切にしてくれたのに、私はそれについてうまく応える事ができなかったのが残念でした。合宿をこんないやがつているわたしを見てお母さんは合宿に参加しなくてもいいと言つたので、しばらくの間合宿へは行きませんでした。そして何年か経つて、一の時久しぶりに合宿に行きました。この時はもう日本語の問題はあまりなかつたのでみんなともよく話ができ、すごく楽しかつたです。それが最後の合宿になりましたが、昔はあれだけいやでしょうがなかつたのに最高にいい思い出となつたのは本当にうれしいです。

アメリカへの疑問
高等部一年　近藤　千洋

最近、私はよくニュースを見る。ニュースを見るたびに、まだアメリカはアフガニスタンに空爆を続けているのか、と思う。それと同時にアメリカのやっていることに疑問を持つ。

九月一日、テロリストが四機の飛行機をハイジャックしアメリカの色々な場所に突っ込んだ。何の罪のない人たちが犠牲になつた。テロリストは、皆、イスラム原理主義者で、アフガニスタンを拠点としていた。この事件に対し、アメリカは報復を宣言した。事件から約一カ月後、空爆が開始され、テロリストグループ、アルカイダの拠点が次々と壊された。しかし、アルカイダの拠点だけでなく、アフガニスタン国民までもが被爆し、何百人もの人が命を落としている。

アメリカのブッシュ大統領は、この空爆を「正義」の戦いだと言った。果たして、アメリカは何の罪のないアフガニスタン国民の命を奪っていても、まだ「正義」の戦いだと言うのだろうか。もちろん、アルカイダとそのリーダー的存在のオサマ・ビン・ラディンは非難され、裁かれるべきだが、アメリカも、人のことを言えるような立場ではないと思う。空爆はテロリスト撲滅のためだけに行われているのではないのだろうか？私の目にはどうしてもアメリカ軍は必要以上のことをしているように見える。アフガニスタンには、沢山の地雷が埋められていて、アメリカが投下した食料を取りに行こうとした時に、地雷を踏み、亡くなったあるいはケガをした人も何十人かいる。この様な現状を放っておくのだろうか？すごく疑問に思う。

日本人より、アメリカの方が平和ボケの「度合い」が高いと思う。第二次世界大戦時、アメリカは参戦していたが、アメリカ本土には攻撃されなかった。死者の数も日本と比べてみればそこまで多くない。一方、日本は何年も攻撃され続け、最後には原爆を二都市に落とされた。その二つの原爆で何十万人も人が亡くなり、生き残った人は深い傷をおった。その頃、アメリカでは普通にとは言わないが、人々は日本の何倍も良い環境の中で暮らしていた。戦争の残酷さを知らないアメリカが勝手に空爆を始めたことに対して、私は強く非難する。

人の友達がいるが、言い合いになると、まるでアメリカ軍の空爆を見ていたようだ。とにかく自分の意見が通るように、強い口調で喋り私に意見を受け入れてもらえるまで繰り返す。私の意見には全くといっても良いほど、聞かない。ようするに、アメリカ人は、「話し合い」という画期的な手段を無視し、全て力で解決しようとしているのだ。そして、相手が降伏するのを待つ。

もし、本当にアメリカがテロを撲滅し、平和が欲しいのならば、もっと難民や苦しんでいる人たちのことを考えて欲しい。難民だけではない。世界中の人々がアメリカ軍の行動を非難しつつある。私もそうだ。テロリズムを撲滅するには賛成だ。しかし、アメリカには力で全てを解決するのではなく、話し合いをするなりして、人々を被害にあわせるのを防いで欲しいと思う。(二〇〇一年一月現在)

世阿弥の心にふれる

森 桂

「能を退屈だと思う人は、想像力に欠けているのです。初めは意味がわからなくても、想像力を働かせて何回も聞いていくうちに、そのよさが分かってきます」 このほど、日本大使館で関根勝・早稲田大学教授が「世阿弥とその芸能理論」という講演を行った。父も兄も能役者で、自らも二〇年にわたり、能楽の修行を積んだという関根教授は、世阿弥の言葉を引用しながら「どの芸事でも、努力を積み上げ、最高の所に達すれば、観客の感動を得るものですよ」と語る。

世阿弥(一三六三? 一四四三?)は、室町前期の能役者で、これまで物まね中心の能から歌舞中心の幽玄

(ゆうげん)能へと作り直し芸術性を高めた。しかし、後援者だった將軍・足利義満の死後は佐渡島へ流されるなど、不遇のうちに没した。

関根教授はまず、能楽の起源について「いろいろな説があるが、奈良時代に中国から仏教とともに伝わった散楽(さんがく)が能の起源と見てよいだろう。散楽は二、三人がグループになって全国を行商して回ったが、彼らは最下層の人とみられていた。地方の人の集まる寺や神社で物売りをしているうちに神社と関わりをもつようになり、神社の祭事で演技をしたり、民衆にはわかりにくかった密教の教えを演技で分かりやすく説明したりしていた」。

「鎌倉時代になると、幕府は神社への圧力を強め土地を没収した。新しい神社を建立するにも経済基盤を失ったため、僧侶や巫女(みこ)を全国へ派遣し喜捨を仰いだ。これは一年がかりの事業で、しかも集め

た金を担いで来なければならなかった。そこで考えられたのが京の都での勧進興行(一種の寄付集め)の開催である」。

「勧進興行が開かれるようになると、神社への寄進という口実が生まれ、これまで見る機会に恵まれなかった貴族や武士たちも見物できるようになった。一二三二年、時の將軍・足利義満は京都の今熊野(いまくまの)で行われた興行を鑑賞、世阿弥を見初めた。それ以後、世阿弥と父・観阿弥(かんあみ)は將軍の後援を仰ぐようになった。世阿弥が一二歳、將軍は一八歳だった。これまでの芸名は鬼夜叉(おにやしや)だったが、藤若(ふじわか)にかわる。世阿弥の世界が大きく変わってゆく転機だった」。

関根教授はここまで一気に話し、「世阿弥は能を花にたとえることを思いついた。『花は季節を、そして美を感じさせる。一年経てばまた咲

く。能も同じではないか』。世阿弥は花の中でもしおれた花が最高だという。健康的であるより、どこかに憂いを感じさせる女性が一番美しい。これを花にたとえると、朝霧の中で曇ったように咲いている花こそ、人の目をひきつける。そこに見るものの想像力が生まれる。能の世界もそうではないか、と世阿弥は考えた。『世阿弥は年とともに花への思いを変えていくが、幽玄、侘び、寂び、枯れという境地をさまよったあと、最後には冷えという境地に至った。花や月が凍った池や湖に映る美しさに感動したのである。世阿弥の言う『冷えに冷えたり』という世界である』。

関根教授はここで一息ついて、
「ぼちぼち退屈してきたのは……」と聞き手をリラックスさせ、「これからは演技について話します」と話題を変えた。

「能の演技を完全に習得するには

一〇年はかかる」と言い、寒稽古(げいこ)で発声練習を何週間も続け、やっと地声と能を演じる時の声がい分けられるようになった苦労談などを披露したあと、

「演技は洗練されていなければいけないのは当然だが、さらに声が遠くにいる観客まで届かなければいけない。能の演技はリアリステックではない。意味のある動きと意味のない動きが渾然(こんぜん)となっているから分かりにくい。その方が深い表現ができるからだ。さらに、見た目が美しいから演技は型にはまっていた」。

そして最後に、「世阿弥に『蘭(らん)たる位の安きところ』という言葉がある。蘭の花は中国では立派なものたとえばに使われるが、創造しようとする努力を積み上げ積み上げて、その最後を積み上げた瞬間に楽なところへ到達する。自分が作り上げたものに作為がなければいほど、

観客は感動する。これはどんな芸術にも共通する」と結んだ。

筆者は、東京で何回か能楽を鑑賞する機会に恵まれたが、能について詳しい話を聞いたのは初めてで、特に「作為のこもった芸術は人を感動させない」という世阿弥の考えに大いに賛同した。前夜聞いた、慶応義塾ワグネルソサエティー・オーケストラの演奏が、若さのあふれる演奏で、ハンガリー人からは好意的な拍手が打ち鳴らされたのにもかかわらず、なにか感動しなかったのは、うまく演奏しようという気持ちが先に立って、自分たちが音楽を演奏する楽しさを忘れてしまった、音楽以外の下積みの努力が足りないからだということが、関根教授の講演で気づいたからだ。

リスト音楽院に留学している人たちにも、世阿弥の心を説明しようと思おう。

行く川の流れ

ラバイ 里美

行く川の流れは絶えずして、しかも元の水にあらず。よどみに浮かぶ泡沫(うたかた)は、かつ消え、かつ結びて、久しく留まりたるためしなし。

九五年春にブダペストに来て以来、早六年一ヶ月が過ぎ、七年という仮にも浅いとは言えない年月が目前に迫ってきている。この度ひょんなことから「ドナウ通信」の原稿依頼を受け、果たして井の中の蛙が如く、家に籠って過ごしてきた私に、そのような大層な役目が務まるのかと心配しつつ、蛙は蛙なりに、七年近くのブダペストでの日々を振り返ってみた。

私のここでの生活は、戸惑いから始まったと言っても過言ではない。九五〜九六年ごろだったと思うが、

印象に残る出来事がある。ある日私は九フオrintの切手を一枚買ったくて、郵便局に行った。長い列に加わり、待つこと二〇分、とうとう私の番がきた。

「九フオrintの切手を一枚ください」と言うと、生憎バラしてある切手がなかったのか、窓口の女性は一〇〇枚の切手がシートになっているものを出して、切り離し始めた。ところがそれですぐに切り離した一枚を売ってくれるのかというところではなく、一〇〇枚の切手を全部切り離れた末、やっと一枚出してくれたのである。何分待ったかは分からない。しかし私には、自分の後に並んで待つ人人の、刺すような視線に耐えている時間が、ひどく長く感じられた。

またある日、午後三時まで銀行が開いているからと出掛け、二時過ぎに着いたが長蛇の列。やっと二時四五分に順番がやって来たので、口座

を開きたい旨の用件を言うと、「今日はあと一五分しかないから、別の日に直直してください」とのこと。職場を抜け出して付き添ってくれた夫が、がっかりしたことは言うまでもない。

中央市場は私が住んでいた自由橋のたもとのアパートから徒歩五〜六分のところにあつたので、週に二〜三回は新鮮な野菜を仕入れに通っていたが、ここではしょっちゅう怒鳴り合う声を耳にした。あるおばさんは買ったパブリカの二つ二つが悪くなりかけていたのに腹を立て、「こんなもん、豚でも食わんぞ!」と怒鳴り出し、売ったおじさんはおじさんで負けじと、「もう売らん!全部返せ!」と言い出す始末。自身の闘争能力も、中央市場をはじめとする各地の市場で鍛え上げられたように思う。一kg一六八フオrintのバナナを八〇〇gと、一kg一六八フオrintのレモンを三〇〇g強で、

二四〇フォリントと吹っ掛けるオヤジがいる。私がちよつと目を離れたスキに秤に載せるので、こつちは正確な数値を見ていない。取り敢えず支払って、買ったものを市場の入口付近にある秤で計り直して、

「やつぱり騙された！」と思うと店に戻り、「私、二四〇フォリント払ったけれど、ちがうんじゃないの？もう一回計り直してくれない？」と言う。本当はお金を払う前に、もう一度計り直してもらうようにすれば良いのだが、なかなかそれが言いにくく、完全に騙されたという確信がないと、強気の態度に出られないのが、私の弱いところ。いずれにしてもブダペストに来た当初は言葉がままならなかったので、片言のハンガリー語に英語を混えて文句を言っていたが、初期の頃は相手の、「俺は知らない。覚えていない」とか、「一〇分前前に買ったと言うけど、一〇分でも何人ものお客が来るんだ。そんなも

んいちいち覚えとらんぞ！」という言葉に負け、勝敗は〇勝五敗といった感じだったが、こつちが戦い方を身につけるにつれ、勝率が上がってきた。この頃では滅多に負けることはない。

住み始めた頃のハンガリーは、「やれやれ、先が思いやられるなあ」といったことが多くって、印象は、今思い出してみても、どうやら悪いことの方が多かったようだ。

この七年近くで最も大きな人生の節目となったのは、九六年六月に娘が生まれたことだろう。当時私はハンガリー政府給費留学生の身分で、ELTEに籍を置いていた。出産した六月は、大学は既に夏期休暇に入っていたので何も問題はなかったが、留学期間がまだ残っていたので、九月中旬には生後三ヶ月になろうとしている娘を連れてクラス分けのミーティングに参加し、一〇月から娘と一緒に通学する許可を得た（それま

で無欠席で頑張って勉強していた甲斐あって、先生方は快く娘と授業に出席することを許してくださった）。結局、娘とは、生後三ヶ月半の九六年一〇月から、生後一ヶ月になる九七年五月まで、共に大学に通った訳だが、冬場の午前八時半からの授業とか、午後五時からの授業とかには、何度も何度もめげそうになりながら、しかし一度も休むことなく出席した。バスに揺られながらも私が思っていたのは、「ああ、早くこの状況から解放されたい」ということだったが、過ぎてみればあの七ヶ月半は、私の人生で最も重きをなす期間として、燦然と輝いている。あの時一度も休まず通ったことは、人生の大きな自信となった。

数年前、長期滞在権を一〇二年毎に更新していくのは身が持たないし、どうせなら永住権があった方が良くということ、永住権の取得に乗り出した。これについて事細かに書く

のは控えるが、娘が一歳になったばかりの頃から Varosligeti fasor の移民管理局に通い始めて、四時間待ち、三時間半待ち、短い時でも二時間待ちを八回ほど経験し、待合室の過酷な状態に身を置き、時の首相 Horn Gyula に、外国人をもっと人間らしく扱うべきだと直訴しようかと憤慨したことも何度かあったが、苦勞が実り、九八年四月、息子の出産を間近に控えた頃、晴れて永住権を手にする幸運に恵まれた。それにしてもし振り返ると、七年近くの年月の中では、『列に加わり、待つこと』だけで、多くの時間が失われていったように思う。

永住権を取得してからは期せずして、地方選挙権が付与されたり、息子を産んだ際には『出産一時金』なるものまで頂戴したりで、ハンガリーにおける私の身分や立場は安定期に突入した。永住権のお陰で棚ぼた式にいろいろな権利を与えられた

が、私が最も驚いたのがその地方選挙権である。九八年の選挙の時、私はこの地における第一回目の投票を経験し、何とも言い難い満足感？ 充実感？ 爽快感？ どう表現して良いのか分からないが、まさしく「やったーっ！」という気分を味わった。今年の秋にもまた地方選挙があるはずなので、その時は投票に行こうと思うが、それにつけ思うことは、日本はどうして永住外国人の地方選挙権のことでこんなにもめるのだろう？ ということである。単純な言い方をすれば『義務だけ課して、権利を認めない』のは卑劣なやり方だと思われない。

「そろそろ可決されたかな」と思っても、相変わらず継続審議中である。日本は国際化、国際化とは言うものの、表面的なイベントだけで終わってしまつては、真の国際化とは言えない。その地に住む（永住）外国人の声にまで耳を傾ける姿勢こそが、

本当の意味での国際化に繋がる第一歩となるのではないだろうか？

ハンガリーに来て以来、良いことも悪いことも、驚くことも考えさせられることも、いろいろなことが多々あった。そしてそれらは時に、祖国日本を顧みる機会をももたらしてくれた。

今私は至って平穏な生活に身を委ねている。しかしこれは波乱の終焉とも言いが切れないようで、まだまだこの先何が起こるか分からない。

ドナウ川がドイツ南西部に源を發し、七つの国に跨って流れたあと黒海に注ぐ様は、さながら自分自身の人生にも思えることがある。

私自身も今がまさしく、ブダペストを流れるドナウ川のあたりにいるのだろう。

日本語教育雑感

佐藤 紀子

一九世紀末のハンガリーの愛国詩人アーブラーニ・エミル(一八五〇年～一九二〇年)は次のような詩を残しています。

マジヤル語(部分、拙訳)

おお、麗しきマジヤル語よ！
一度でも汝を口にしたものは、
けっしてそれをうち棄てること
はない！
聖なるものとして汝の宝玉を受
け入れんと、
心は汝を守る祭壇とならん。

この詩のように、ハンガリーの詩人や作家の多くが、母語であるハンガリー語に対して特別な愛着を持っているようで、母語に対する想いを

詠った詩や散文を綴っています。それらを集めた、五〇〇ページにもなるアンソロジーが編まれるほどです。スラブ系やゲルマン系の諸民族に囲まれながらも、ハンガリーが歴史の藻屑と消えなかったのは、ハンガリー人としての民族的自覚が大変強かったことが一因と考えられますが、右の詩にも詠われているように、その民族的覚醒を支える一つの柱がハンガリー人の母語に対する執着でした。

振り返って、日本人は、日本語に對してこのような熱い想いを抱いているでしょうか。日本人は日本語を水や空気と同じように、あつて当然のもの、生まれてから何もせずとも当然そこに存在しているものと考えてきたように思います。最近では水も空気も汚れてしまい、その大切さが身にしみるようになってきました。が、日本語の重要性についてはまだそういう意識はほとんどないようで

す。しかし、グローバル化が進むなかでモノやヒトの交流が進み、日本に定住したり、一時滞在したりする外国人が増え、二一世紀には、従来国内で絶対的優位を占めていた日本語の地位が揺らぐやもしれません。

その一方で、ヨーロッパでは日本や日本人、日本文化はまだまだべーるに包まれた存在であるように思えます。先日、授業の中で、日本人の習慣について「x式のクイズをするときに手を合わせてお辞儀をする」という項目で、全員が「をつましました。これだけ日本のアニメや日本製品が普及し、空手や柔道などの人気も高く、親日的と言われるハンガリーにあつても、日本に関して様々な誤解が存在するようです。また、最近、剣道発祥の地は日本ではなく我が国だと世界に名乗りをあげたアジアの国があるそうですが、日本から外国への情報発信を怠ると、予期せぬ

事態に遭遇することもあるようです。こうした状況を見過ごすのは、日本人にとって不幸なことではないでしょうか。

国内・国外を問わず、日本人と外国人の誤解を解き、相互理解を助けるために、コミュニケーションの手段として日本語教育を行うことが、将来の日本にとって大変重要になってくると思われます。日本語教育は、文法だけを教えるものではありません。文法外コミュニケーション能力や社会文化能力を養い、外国人が日本人や日本社会・文化に触れる窓口を提供するものです。日本語教育の目的の一つは、日本人の行動様式や習慣、考え方がわかり、日本人とのコミュニケーションがスムーズにできる外国人の養成です。また、将来は、日本の社会や文化、経済に通じた外国人にそれぞれの母語で日本の情報を発信してもらう必要性がますます高まっていくでしょう。

う。海外での日本語教育はその出発点です。というのも、いくら日本人に対する英語教育を充実させても、日本からの情報を発信できるほどの、英語話者と同じ英語力と教養を身につけた日本人を育てることは容易ではありませんし、ましてや英語以外の言語ではきわめて難しいからです。日本人の英語能力の向上も大切ですが、日本語教育を通じて世界に日本愛好者の裾野を広げ、日本語や日本文化に通じた優秀な専門家や翻訳家を育て、彼らの母語で日本文化を発信してもらうことも大変重要ではないかと考えます。これが外国人に対する日本語教育の二つ目の目的です。三つ目の目的は、外国で日本語教育を受けた優秀な人材を日本に送り込むことによって、日本の社会や文化の多様性や経済の活性化に貢献することです。日本語を身につけた優秀な外国人は、異なる発想や考え方で日本の社会や文化、経済に新しい

息吹を吹き込んでくれることでしょう。最近では日本語で書く外国人作家や詩人なども登場し、様々な分野で外国人が活躍しています。日本語教育の分野でも世界的に有名なチエコ出身の言語学者L・K・ネウストプニーなどが日本で教えるようになりました。かつて中国や朝鮮半島からわたってきた渡来人が日本の産業や文化を豊かにしたように、二一世紀は世界各地からやってきた、優秀な技術者や専門家、定住外国人が日本の社会や経済、文化を豊かにしてくれるでしょう。

語学教育は基礎教育ですから、科学の基礎研究と同様に、すぐに利益に結びつくものではありません。成果は一〇年後二〇年後に現れてくるものだと思います。筆者の勤め先の大学では一九八四年から第二外国語として日本語教育が行われていますが、ほんの一〇年ほど前までは日本語を選択した卒業生が日本やヨーロッパ

ツパで日本人や欧米人に混じって日本語を使って仕事をするようになるとは考えもつきませんでした。せいぜいハンガリーに進出した日系企業か、ハンガリー企業あるいは政府系機関の駐在員として日本語が使えればと思っていたものです。しかし、ここ数年ハンガリー経済のグローバル化は著しく、労働力の移動も予想をはるかに越え、外国で働くハンガリー人の数も飛躍的に増加しています。かつて日本語を学習した卒業生が、今や日本や欧米の金融・広告・自動車産業などで日本語を使いながら活躍しています。今後、このような傾向はどんどん進んでいくことでしょう。

このように、海外での日本語教育はますます必要となってきましたが、周知のように日本人なら誰でも日本語が教えられるわけではありません。また、外国で日本語を始めた外国人がすぐに日本語が上達するほ

ど、日本語はやさしくありません。

新しい時代のニーズに合った、近代的で効率的な教授法や教材の開発、教師の育成・研修、世界各地で教える教師のネットワークの充実などが、日本語教育の発展には不可欠です。

今年の九月にブダペストで行われる第七回ヨーロッパ日本語教育シンポジウムは、まさにこのような目的で開かれます。ヨーロッパ各地で日本語を教える教師達が一堂に会し、日本から招聘した専門家による講演に耳を傾け、研究の成果や授業の試みを発表し合う、研鑽と交流の場となるものです。近年、定年退職後に日本語教師を始める方が増えていますが、元商社マン、元海運マン、元教師など、多彩な経歴を持つ人生の先輩方も日本語教育の分野に乗り出しています。シンポジウムは、ヨーロッパだけでなく、世界各地のベラン・中堅・新米の日本語教師達が経験と意見を交換する場でもありま

す。

ヨーロッパにおける日本語教育の将来は、教師の資質や能力、熱意にかかるところが大きいのですが、それ以上に日本政府、ヨーロッパ在住の日本人、日本企業の方々のご理解とご支援など、広い意味での「日本」からのバックアップが大きな意味を持っていきます。日本語学習者との交流会や懇親会、各種日本関係イベントへの招待、日本企業におけるインターンシップの活用など、様々な面で日本語教育へのご支援をお願いしたいと思います。

映画時評

アカデミー作品賞受賞

A Beautiful Mind

(Egy csodálatos Elme)

盛田 常夫

現在、ブダペストの各映画館で二月末より上映中。日本での公開は三月三〇日から。英語の原語上映で、ハンガリー語字幕。天才数学者ジョン・ナッシュ (John Forbes Nash) の伝記 (Sylvia Nasar, *A Beautiful Mind*: *A Biography of John Forbes Nash Jr.*, Simon & Schuster, 1998、邦訳『ビューティフル・マインド』新潮社、二〇〇二年三月) を映画化したもの。

数学者ナッシュの生涯

ナッシュは一九九四年に、ハンガリー出身のハルシャニー、ドイツのゼルテンとともに、「ゲームの理

論」の発展に貢献した業績で、ノーベル経済学賞を受賞した。経済学賞ではあるが、これら三名は皆、本能的には数学者である。応用数学としての「ゲームの理論」の現代的発展、つまり不完全情報下の非協力的なゲームにおける均衡解の存在を分析したことが直接の受賞理由である。

数学者の一生が映画になるのは稀だが、ナッシュは三〇歳を過ぎて精神分裂病を発病し、ほぼ三〇年間の波乱と療養生活の後に、再び大学に戻り、教鞭を取り始めたという特異な一生を送っている。そして、大学に戻ってほどなく、まったく予期せぬノーベル賞受賞の知らせが入る。プリンストンのフアルテイ・クラブで若きナッシュが垣間見たノーベル賞受賞者への伝統的な祝福儀礼を、今度はナッシュが受ける番になる。分裂病が完治したわけではないが、夫人の献身的努力で分裂病を抑えつつ、通常の生活に戻ることができた

感動の物語が映画化に至った。

プリンストン入学から分裂病へ

ナッシュはカーネギー大学を二〇歳で卒業し、プリンストン大学のPhDコースに入学する(一九四八年)。映画はプリンストンの学生寮に入るところから始まる。カーネギー大学では初め化学を専攻したが、後に数学科に転入し、数学の才能を評価されて、プリンストンに入学許可された。もともと数学者として、リーマン幾何学や代数的多様体を専門にする数学者だが、プリンストンで国際経済学の講義を受けてから、「交渉の理論」(数学的モデル化)に関心をもつようになり、ノイマンが開発した「ゲームの理論」の拡張を研究するようになった。ノーベル賞受賞の対象になったのは、一九五〇年に発表された「非協力ゲームにおける均衡解の存在証明」である。

つまり、受賞の対象論文は四〇年

以上も前のもので、大学院生のナツシュがプリンストンに職を得るために書き下ろした論文である。未だ経済学に数学者が集団的に転身を図る初期の段階で、ブラウアーの不動点定理を応用して、均衡解の存在証明をおこなった。これがミクロ経済学の上級テキストに出てくる「ナツシュ均衡」で、この成果がノーベル賞の受賞対象になっている。以後、経済学では一九五〇年代から六〇年代にかけて、数理経済学が隆興を迎えたが、この分野にナツシュより後に参入した数理経済学者が早々とノーベル経済学賞を受賞したのにたいし、開拓者のナツシュが忘れられていたという訳だ。

それはさておき、映画では、国防省がナツシュの数学的能力を、ソ連の暗号解読に利用することからストーリーが展開する。そして、ナツシュはこの仕事を契機に、精神分裂症状を見せるようになる。時まさに冷

戦激化のマツカシー旋風が吹き荒れ始めていた時期である。分裂病を誘発した暗号解読のようなスパイ活動が、どこまで現実でどこからが幻想部分か映画では明瞭でないが、この種の諜報活動への参加がナツシュの精神を蝕んでいったことは疑いない。アメリカの研究者のなかから、ソ連のスパイを摘発するキャンペーンが張られた時代である。政治に無頓着な素朴な学者が、スパイや逆スパイ、二重スパイ摘発の犠牲になったと考えてもおかしくない。しかし、映画ではそのところはまったく説明されていない。どうして暗号解読の幻想に陥ったかの分析描写はなく、あたかも彼の個人的資質が分裂病を招いたように描かれている。ここが現代アメリカ映画の限界か。

数学者と分裂病

ナツシュの分裂病は一九五〇年代末に深刻になり、それが理由でプリ

ンストン大学を辞職する。以後、精神病院と自宅を往復する生活になるが、何日も消息不明になったり、幻覚に悩まされる生活を送る。病院でのシヨック療法を嫌う夫を自宅で快方する決意をした夫人アリスアは、以後、三〇年に近い献身的な努力を積み重ねる。やがて、一九八〇年代半ばになって、分裂症状を抑えながら、社会復帰（大学での教鞭）を遂げる。そして、突然にノーベル賞のニュースを受ける。このところが、映画受けするところだろうが、やはり分裂病を誘発した暗号解読の仕事や、冷戦時代のアメリカの大学と国防省との関係などをもっと描いて欲しいという欲求不満が残る。

天才数学者で、分裂病を患ったり、躁鬱病にかかった人物は少なくない。現代数学の基礎を築いたカントールは、連続体仮説の証明に入る頃から躁鬱の症状を見せ、シエイクスピアの作品の真の作者はフランシス・ベ

ーコンだという証明に力を注ぐという無駄な努力を始めている。

また、チェコ出身の天才数学者ゲーデルは、二六歳にして、数学の根本を揺るがすような不完全定理(すべての数学的公理系には、公理系内部で証明不可能な定理が存在する)を発表したが、以後、プリンストンの高等研究所に移ってから、重い鬱病と被害妄想に襲われるようになった。

ゲーデルやナシユと比較すると、それぞれ同じ世代にあたるハンガリーのノイマンやエルドウシユははるかに遅く生きています。ノイマンの社会的適応力は驚くべきものだし、エルドウシユは逆に社会的出世という意味での適応力は皆無であったが、世界中で多くの弟子を育て、議論する数学仲間を持っていた稀有な数学者であった。外の世界に開かれた数学者と内に閉じこもった数学者という典型的な対立モデルを見るようである。

ノイマンとノーベル経済学賞

ノーベル経済学賞は一九六九年にスウェーデン中央銀行創立三百年を記念して創設されたもので、ノーベルの意思によるものではない。

戦後の数理経済学の発展に貢献した学者を中心に受賞が続いているが、戦後の数理経済学の基礎を築いたのは、まさにノイマンであることを忘れてはならない。ナツシユの薄っぺらい論文がノーベル賞なら、ノイマンは十回受賞してもおかしくないほど彼の貢献は大きい。

ノイマンが一九二八年に発表した「ゲームの理論モデル」と一九四四年に発刊した大著『ゲームの理論』が、今日のゲームの理論を基礎である。このテーマだけで、戦後に研究を始めた学者が、実に六名もノーベル経済学賞を獲得している。

さらに言えば、一九三五・三六年に発表した不等式体系で表示された「均斉成長モデル」の技法は、戦後

の新古典派数理経済学による成長モデルと均衡分析にそのまま利用されている。この分野でノーベル経済学賞を受賞した学者も五名はくだらない。まさにノイマン様様なのである。

ノイマンは経済学者が数学に無知なのに驚いていたようだ。モデル作りが得意なノイマンにとって、経済モデルの構築は、ホビーのようなものだった。経済学で利用される数学は純粋数学から見ると、きわめて初等的なものだ。数学の世界ではとくに評価の対象になるものでなくても、経済学理論のモデルに応用されただけでノーベル経済賞が得られる。だから、多分、ノーベル賞のない数学者の眼からは、ノーベル経済学賞はいかかわしい賞に映っているだろう。数学者だけでなく、経済学の現状を知る物理学者の中には、経済学や経済学賞のもつ意味を疑問視する人が多いのは、こういう理由による。

日本人会からの報告

商工部会より

菱木 勤治

二〇〇二年度に入り、新幹事体制のもと商工部会は活動を続けている。新年度の新しい試みとしては、一月例会でアンケートを実施したことだ。アンケートは四三枚が配布され、三八枚が回収された。主な結果をみると、商工部会活動の満足度については、満足しているが一七名、やや満足が一七名、不満足が一名であった。例会の開催時間は、夜間開催が一五名、現行（昼）が一一名、昼夜半々が六名であった。各種テーマでの勉強会の開催は一七名が希望し、講演については経済、税制など多くの希望テーマが出された。その他としては、大使館からの情報提供が少ない

のもっと提供して欲しいという意見がだされた。このような結果を受け、地方に工場を持つ企業の代表者がより出席しやすいように、三月例会から開催時間を夜へ変更した。今後ともこれまでの慣例にとらわれず、必要があれば小さいことでも改革・変更していきたい。

三ヶ月間の最も大きなイベントは、一月一五日に開催した新年会。ここでは吉本興行の協力によりブダペストで開催された国際サーカス大会参加者の一部が、無償でパフォーマンスをみせてくれた。協力してくれたのは同興行から日本人二名、ハンガリーや他の国から一一名のプロが参加して、手品・舞踊など数々のパフォーマンスを楽しむことができた。普段これ程身近で、しかも国際的なパフォーマンスを楽しむ機会はめったにないため、子供も含む多くの参加者にはすばらしい新年会であった。この期間の新規加盟社は、Ortech

Euroep Kft（ユーシンの一〇〇%子会社、工場はキシュベール）で、自動車部品を生産している。逆に、SEI（住友電工が出資）は退会した。その他の動きとしては、ハンガリーがビザや労働許可などの制度を一月から変更し、遅れや不都合な面がでているため、当局に対し陳情書を出す準備をすすめているところである。

レジャー部会より

熱気むんむん。楽しかった〜！

野沢 正之

去る三月三日、日本人会（レジャー部）主催の恒例の室内ゲーム大会がケンピンスキーホテルで開催されました。参加者は子供達を中心に四〇名を数え、「カードゲーム」、「ダーツ」、「ビンゴ」等のゲームに熱気むんむんの楽しい一日となりました。

今年は特に、家族皆で楽しめる、をテーマにいろんなゲームに参加出来るようにプログラムを組みましたが、日本人補習校の先生方の精力的なご協力を得て何とか上手く進行が出来たのではないかと考えています。今後も企画の内容、会場の設定、抽選会のやり方等々皆様のご意見を頂き、より楽しいものにして行きたい

と思います。よろしく願いいたします。

ご協力頂いた大使館、日本人補習校及び各企業の皆様に心からお礼を申し上げます。ありがとうございます。

二〇〇二年度 日本人会室内ゲーム大会：公式記録

* 参加者数：一四三名

* ゲーム入賞者

【俳聖カルタ】

(一〜三年の部) (四年生以上の部)

優勝 荒木 将臣 上原 彩香

二位 吉原 岬 上原 康士郎

三位 堀部 和加奈 太田 祥子

四位 岩谷 茜 上坂 桃

【デュエルモンスター】

(低学年の部) (高学年の部)

優勝 塘 健介 手島 慎平

二位 山名 草太 吉原 翼

三位 山名 杉太 室本 一樹
四位 ハンマー太郎 小野田 陽

【ダーツ】

(小学部)(中学部) (一般の部)

優勝 コズマ・ロバート

手島 慎平 上原 智子

二位 清水 郁馬 岩谷 篤

高久 圭二郎

三位 糸木 慧 上原 彩香

福井 祐介

【麻雀】

優勝 水本 信二(クラリオン)

準優勝 浪瀬 靖志(ブダカラー)

三位 上坂 彰(タナシン)

B B 林 隆則(Euro Wire)

役満 吉岡 直道(三井物産)

日本人会事務局より

二 二年度初行事「室内ゲーム大会」には多くの方のご参加ありがとうございました。本年度上半期の行事予定は、次の通りです。

五月一二日(日) ソフトボール大会&バレーボール大会。

会場は例年通り、Zepiigetの運動場です。

六月中旬には、巡回健康相談があります。会場は、大使館および補習校を予定していますが、詳細は追って皆様にご連絡します。皆様のご参加をお待ちしています。

このほか、六月にはやはり恒例となっている日本人会遠足を予定しています。これも詳しいことは、のちほど、皆様にお知らせいたします。

また、年会費(一般会費)については、三月のゲーム大会当日に現金でお支払いいただいた方には、近日中に領収書をお送りします。

その他の会員の方々には、例年通り、銀行(郵便局)の振込み用紙を送付いたします。本年度より、銀行口座が変わったため、準備に手間取っていますが、ほどなくお送りできますので、皆様のご理解とご協力のほどをよろしく願います。

(酒井 由美子)

編集部より

前回通信で松本大使の寄稿文から、以下の下線部が脱落していました。ここに該当箇所を掲載し、お詫びいたします。

「地方行事でも、七月はじめヘレンド社の一七五周年記念式典に夫妻で招かれました。一〇月、ケチケメート市のコグーイ音楽研究所に対する文化無償引き渡し式があり、そのほか、八月のエステルゴム市で文芸座、富山県芸術文化協会の公演があり、ペーケシユチャバ市等での日本祭、一月のレチエクの日本文化祭にも参加しました。レチエクではヘヴェシユ県案内の日本語版をもらい、同県と山梨県との交流の足跡を確認できました。

文化行事は大使館の活動にとどまらず、地方自治体や民間団体、あるいは個々の企業や個人レベルでも

様々な交流が行われています。夏にはブダペスト市と友好協力関係にある大阪市助役一行が訪問、一〇月には秋田県千葉副知事一行が訪問し、ハンガリー工科大学等との科学技術協力を推進し、また、安東ソーズ・ハンガリー社長の熱意でモール市で日本祭りが行われました。ハンガリー側でも夏にはデムスキー・ブダペスト市長が岐阜県梶原知事の招待で訪日、また、一〇月にコーシヤ会長の黒沢明映画週間などの企画もありました。一二月にはサンヨーが主なスポンサーとなつてヴィハール・ユデイトさんと学生たちが翻訳した日本の童話集「桃太郎」の出版記念会がサーライみどりさんも後援されて行われました。盛田常夫さんが日本語に翻訳された『異星人伝説』マルクス・ジヨルジュ教授著の出版記念行事もありました。各方面で活発な文化交流が行われていることは喜ばしい限りです」。

編集室より

たいへん多くのご寄稿、ありがとうございます。皆様からの寄稿をお待ちしています。

原稿送付の際は、できましたらメイルへの添付ファイルをお願いいたします。手書き原稿は、FAXにてお送りください。

次号の締め切りは、六月下旬とさせていただきます。

TEL/FAX: 356-5721

e-mail: nihonjinkai@axeleroh.n

電話・FAXが変わりましたので、ご注意ください。